

日の出

国木田独歩

青空文庫

なにがはふがくしやうかう
 某法學士洋行の送別會が芝山内の紅葉館に開か
 れ、會の散じたのは夜の八時頃でもあらうか。其崩が七八名、
 京橋區彌左衛門町の同好俱樂部に落合つたことがある。
 小介川文學士が伴ふて來た一人の男を除いては皆な此俱樂部
 の會員で、其の一人はオックスホード大學の出身、其
 のひとり一人はハーバード大學の出身など、皆なそれ／＼の肩
 書を持って居る年少氣鋭、前途有望といふ連中ばかり。
 卓を圍んでてんで吐き出す氣焰の猛烈なるは言ふまでもない
 ことで、政論あり、人物評あり、經濟策あり、時に神
 學の議論まで現はれて一しきりはシガアの煙を々々濛々

たる中なかに六七ろくしちの人面じんめんが隠見いんけん出沒しゆつぽつして、甲走かんばしつた肉聲にくせい
 の幾種いくしゆが一高いつかう一低いつてい、縦横じゆうわうに入り亂れみだ、これに伴ともなふ音おん
 樂がくはドスンと卓たくを打うつ音おと、ゴトくと床ゆかを蹶おとる音おと、そして折をり
 く冬ふゆの街ちまたを吹ふき荒あらす北風きたかぜの窓まどガラスを掠かすめる響ひびきである。時とき
 々／＼、使童ボーイが出しゆつ入にふして淡泊たんぼくの食品くひもの、勁烈けいれつの飲料いんれうを持もちは
 運こんで居ゐた。ストーブは熾さかんに燃もえて居ゐる——
 『貴殿あなたは何處どこの御出身ごしゆつしんですか』と突とつぜん然かうとう高等かうとう商業しやうげふ出しゆつ身しん
 の某な、今なは或ある會社くわいしやに出でて重役ぢゆうやくの覺目おぼえ出度でたき一人ひとりの男をとこが小
 すけがはぶんがくしとなりすわ介川文學士すけがはぶんがくしの隣となりに坐あつて居ゐる新來しんらいの客きやくに問とひかけた。勝手かつてな
 氣焰きえんもやゝ吐はき疲くたぶれた頃ころで、蓋けだし話頭わとうを轉てんじて少すこし舌したの爛たぐれを
 癒いやさうといふ積つもりらしい。人々ひと／＼も同意どういと見みえて一時いちじに口くちを閉とぢ

たけれど、其の中の二三人は別に此間に氣を止めず、ソファに身を埋めてダラリと手を兩脇に垂れ、天井を眺めて眼を細くして居る者もあれば、シガーをパク／＼ふかして居る者もある。一人は毒瓦斯を抜くべく起つて窓を少し開けた。餘の人々／＼は新來の客に目を注いだ。

『僕ですか、僕は』と言ひ澱んだ男は年の頃二十七八、面長な顔は淺黒く、鼻下に濃き八字髭あり、人々の洋服なるにひきちがへて羽織袴といふ衣装、今は都下で最も有力なる某新聞の經濟部主任記者たり、次の總選舉には某黨より推れて議員候補者たるべき人物、兒玉進五とて小介川文學士は既に人々に紹介したのである。

兒玉は先程來、多く口を開かず、微笑して人々の氣焔を
 聽て居たが、今突然出身の學校を問はれたので、一寸
 口を開き得なかつたのである。

『僕の出た學校をお尋ねになるのですか。』と兒玉は語を續う
 として、更に斯う問ふた。

『さうです。君の出られた學校です。三田ですか、早稲田です
 か。』と高等商業の紳士は此二者を出じといふ面持で問
 ふた。

『違ひます』と兒玉は微笑した。

『オオさうですか。何處です。』

『大島學校です。』

『おほしまがくかう
大島學校？ 聞いたことのない學校ですな、お國の學校
ですか。』

『さうです、故郷の小學校です、私立小學校です』と言つた時
の兒玉の顔は眞面目であつたけれど、人々は笑ひ出した。

『戯談を言つては困ります。だから新聞記者は人が悪い。
人が眞面目で聞くのに。』と高商紳士は短くなつたシガーを
ストーブに投げ込んだ。

『僕も眞面目で答へたのです。全く僕は 大島小學校の出身
です。故意と奇妙な答をして諸君を驚かす積は決して持な
いので。これまでも僕は 出身の學校を聞れましたが。初か
ら答へない時もあり、答へる時は何時此の答をするのです。』

『さうすると貴殿は小學校以外の教育はお受にならんかつたのですか。と申すと失敬ですが其以外の學校にはお入にならなかつたのですか』とソファに掛けて居たオックスフォード出身の紳士が身を起して聞いた。其口元には何となく嘲笑の色を浮べて居る。

『さうです、僕はオックスフォードにもハーバードにも帝國大學にも早稲田にも三田にも高等商業學校にも居たことは無いのです。たゞ故郷の大島小學校を出たばかりです。斯う申すと、諸君は妙にお取になるかも知れませんが、僕はこれでも窃かに大島小學校出身といふことを誇つて居るのです。又た心から感謝して居るので御座います。僕は不幸にして

外ぐわいこく國こくに留學りうがくすることも出來できず、大學だいがくに入はいることも出來できず、
 ですから僕ぼくの教育けういく、所謂いはゆる教育けういくなるものは不完ふくわんぜん全ぜんなもので
 しよう。

けれども尚なほ僕ぼくは、大島おほしませう小學校がくかうの出しゅつ身しんなることを、諸しよく
 君くんの如ごとき立派りつぱな肩書かたがきを持もつて居をらるる中うちで公言こうげんして少すこも恥はぢず、
 寧むしろ誇ほこつて吹ふい聴ちやうしたくなるのです。

問とはれなければ黙だまつて居あます。問とはれても言いふて益えきなき仲間なかまに
 向むかつては黙だまつて居あます。けれども諸君しよくんの如ごとき教育けういく高たかき紳士しんしに
 問とはれては實じつに眞面目まじめに僕ぼくは、大島おほしませう小學校がくかうの出しゅつ身しんといふこ
 とを公言こうげんするのです。

早稲田わせだを出でたものは早稲田わせだを愛あいし。大學だいがくを出でたものは大學だいがく

を愛するのあひは當然たうぜんで、諸君しよくんも必ずかなら其出身そのしゆつしんの學校がくかうを愛あひし

且かつ誇ほこらるゝでしよう。其如そのごとく僕ぼくは故郷こくにの大島おほしま小學校せうがくかうを愛あひ

し且かつ其出身そのしゆつしんたることを誇ほこるのです。』

『そうです、僕ぼくも故郷こくにの小學校せうがくかうを愛あひします。』と言いつたのはハ

ーバード出しゆつしん身の紳士しんし。

『そして誇ほこりますか。そして其出身そのしゆつしんたることを感謝かんしゃします

か』と問とひ返かへした兒玉こだまの口調くちやうはやゝ激げきして居ゐた。

『さうです。』

『何故なぜですか』と問とふた兒玉こだまの眼めは輝かざいた。

『イヤさう眞面目まじめに問とはれては困こまる。僕ぼくは小兒こどもの時ときを回くわい想さうし

て當時たうじの學校がくかうを懐なつかしく思おもふだけの意味いみで言いつたのです』とハ

バードは罪のない微笑を浮べて言譯した。

「解りました。それだけの意味なら解りました。けれども貴殿が

そういうふことを申されるのも要之、僕が一の小さな小學校の出

身であることを誇るとか、感謝するとか言ふのは、矯激

の言を弄して自ら欺むき又自ら快とする者のやうに取つて居らるゝ

からだらうと思ひます。しかし、僕は決してさういふ輕薄な心

を以て言ふのではないのです。若し諸君の中、僕と同じく大

島小學校に居られた方が有たなら、矢張僕と同じやうな情を

持れるだらうと信じます。

大島小學校に居たものが、今東京に三人居ます。こ

れが僕の同窓です。此三人が集まる會が僕等の同窓會で

す。其一人は三田を卒業して今は郵船會社に出て居ます。其一人は法學士となつて今は東京地方裁判所の判事をして居ます。けれども彼等二人は僕と同じく大島小學校出身なることを今でも僕と同じやうに誇り且つ感謝して居るのです。そして僕等は月に一度同窓會を開いて一夕を最も清く、最も楽しく語り且つ遊ぶのです。』

兒玉の言々句句々、肺腑より出で、其顔には熱誠の色動いて居るのを見て、人々は流石に耳を傾むけて謹聽するやうになつた。

オックスホード出身の紳士は年長者だけに分ても兒玉の言ふ處に感じた體で。

『それほどに言はれますからには、其大島小學校とやらいふ
そのおほしませうがくかう
 學校には何か特種なにかとくしゆの事があつて、貴殿あなたの心をそれほどまでに
うご
 動かして居るのだらうと思はれます。それをお話はなし下さいませ
 か。ね、諸君しよくん、それを聞かして戴いただかうではないか。』

『さうとも、兒玉こだまさん僕ぼくの言つたことはお氣きに觸さはらんやうに願ねがひ
 ます。何卒どうぞその大島小學校おほしませうがくかうのことを話はなして貰もらひたいものです』

とハーバードは前言ぜんげんのお謝罪わびにオックスホードに贊成さんせいした。

『諸君しよくんがお聽きくくだ下くださるなら申まうします、強しひては申まうしません。餘あまり
おもし
 面白い話はなしではないのですから。眞面目まじめな事實じじつは流行りうかうの小説せうせつ
すこおもむきごと
 とは少し趣おもむきを異ことにしますから』と兒玉こだまは微笑びせうを洩もらして『小説せうせつ
おもしろ
 も面白おもしろう御座ございます。けれ共事實どもじじつは更さらに面白おもしろう御座ございます。』

『是非お話を願ひたいものです』とハーバードは乗氣になつた。

『宜しう御座います、それではお話しましよう。』

僕の十二の時です。僕は父母に従つて暫く他國に出て居ました
が、父が官を辭すると共に、故郷に歸りまして、僕は 大島小
學校といふに入りました。

海岸から三四丁離れた山の麓に立て居る此小學校は見た
と決して立派なものではありません。殊に僕の入つた頃は粗末な
平屋で、教室の數も四五しか無かつたのです。それで他國の立
派な堂々たる小學校に居て急に其様見すばらしい學校に來
た僕は子供心にも決して愉快な心地は爲なかつたのです。
けれども僕の故郷は二萬石の大名の城下で、縣下では

殆んど言ふに足らぬ小な町、殊に海陸共に交通の便を最も缺
 て居ますから、純然たる片田舎で、日本全國津々浦
 々までも行わたつて居る筈の文明の恩澤も僕の故郷には其
 微光すら認め得なかつたのです。學校といふのは此大島小
 學校ばかり、其以外にはいろはのいの字も學ぶ場所はなかつ
 たので御座います。僕も初は不精々々に通つて居ました。

校長の名は大島伸一、其頃僅に二十七八でしたらう。

背は左まで高くはないが、骨太の肉附の良い、丸顔の頭の
 大きな人で眦が長く切れ、鼻高く口緘り、柔和の中に威嚴のある
 容貌で、生徒は皆な能く馴れ親しんで居ました。僕が此校
 長の下に大島小學校に居たのは二年半で、月日にすれば

言ふに足らず、十二歳より十五歳まで、人の年齢にすれば腕

白盛でありましたけれど、僕が眞の教育を受けたのは此時

、僕の一生の羅針盤を置れたのは實に此時です。

僕が大島學校に上つてから四五日目で御座いました、四十

を越えた位の一人の男が學校の運動場に来て、校長と頻

りに何事か話して居ましたが、其周圍に七八名の生徒が立つ

て居て、顔を上げて二人の物語を聞いて居ました。暫くして其

男は丁寧にお辭儀を爲て、校長も至極丁寧に禮をして、

そして二人は別れました。

僕は子供心にも此様子を見て不審に思つたといふは、其

男の衣服から風采から舉動までが、一見百姓です、

純然たる水呑百姓といふ體裁です、けれども校
 長の之に對する様子は郡長様に對する程の丁寧なこ
 ので、既に浮世の虚榮心に心の幾分を染められて居た僕
 には全く怪しく映つたのです。

けれども家に歸つて別に此事を父にも問はず、學校朋輩
 にも聞きませんでした。

一月經たぬ内に自然と此不審が晴れて來ました。四十男の
 水呑百姓と思つたのは、學校より十町ばかり隔だつて居
 る松林の奥に一構の宅地を擁し、米倉の三棟を並べて
 居る百姓、池上權藏といふ男で、大島小學校の創
 立者、恩人、保護者であつたのです。それならば何故、池上

みせうがくかう なのら
 小學校と名稱ずして おほしませうがくかう
 大島小學校といふ校 かうちやう
 長と同姓 どうせい

めいしよう つ
 の名稱を付けたか、諸君も必ず不審に思はれるでしょう。これ

には又意味の深い理由が有るのです。

ぼく このせうがくかう
 僕が此小學校に入る僅か四年前に此學校は創立され

たので、其より更に十年前のこと、正月元日の朝でし

た、新年の初光は今將に青海原の果より其第一線を

投げ、東雲の横雲は黄金色に染り、沖なる島山の頂は紫嵐

に包まれ、天地見るとして清新の氣に充たされて居る時、濱は

寂寞として一人影なく、穩かに寄せては返へす浪を弄し、

又弄されて千鳥の群は岩より岩へと飛びかうて居ましたが、斯か

る際にも絶望の底に沈んだ人の心は益々闇を求めて迷ふもの

と見え、一人の若者ありて、蒼ざめた顔を襟に埋め、一の岩角に蹲居つて頻りと吐息を洩して居ました。彼は其覺悟を決めながらなほ、躊躇うて居たのです。

人の足音に驚ろいて後を振り返へると一人の老人が近づいて來る處です。老人が傍に來て、

『日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか』と優しく言葉をかけるまで、若者は何を思ふ暇もなく、ただ茫然と老人の顔を見て居たのです。

『見なさい今だ、今が初日出だ』と老人は言ひつゝ海原遠く眺めて居るので、若者も連られて沖を眺めました、眞紅の底に黄金色を含んだ一團球は今しも半天際を躍出でて、暫し

たゆたふて居る様です。

『神々しいぢやアないか、人間といふものは何時でも此初日出の光を忘れさへ爲なければ可いのぢや』と老人は感に堪えぬやうに言つて手を合して靜かに禮拜しました。若者も思はず手を合はしました。見るが中に日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者は恍惚として此景色に打れて居ました。

『私は六十になるが斯な立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美くしい初日の出を拜みたいものだ。あゝ佳い心持ぢや』と老人は言つて更に若者に向ひ『お前さんは何處の者ぢや』と問ひました。

『村の者で御座います。』と若者は僅に答へました。老人は
 そのにうわ
 其柔和な顔に微笑を浮べて

『毎年初日の出を拜みに出るのか。』

『さうでは御座いません。』

『さうか、それでは今年が初めてだの昔からも一年の謀は元
 旦にありといふから、お前さんも、今日の日の出を忘ないで居
 なさい如何じや大變顔の色が悪いやうじやがそんな元氣のない
 顔色をして居ては世の中を渡れるものではない、一同に日の
 出を拜んだも目出度い縁じや、これから私の宅へ來るが可い、雜
 煮でも祝はう。』

老人は先に立て行くので若者も其儘後に従き、遂に老

人の宅うちに行つたのです、砂山すなやまを越え、竹藪たけやぶの間の薄暗あひだうすぐらき

路みちを通ると士族屋敷しぞくやしきに出る、老人らうじんは其屋敷そのやしきの一ひとつに入りました。

老人らうじんの名なは大島仁藏おほしまじんざう、若者わかものの名なは池上權藏いけがみごんざうである

といふことを言へば、諸君しよくんは、既にすで大概たいがいの想像さうざうはつくだら

うと思ひます。

老人らうじんは若者わかものの自殺じさつの覺悟かくごを最初さいしよから見取つて居たので

すけれども最後さいごまで直接ちよくせつにさうとは一言いちごんも言ひませんでし

た。

屠蘇とそを飲のましながら、言葉靜ことばしづかに言いつて聞きかした教訓けふくんは決けつし

て珍めづらしい説せつではなかつたのです。少し理窟すこりくつを並ならべる男をとこなら誰だれで

も言いひ得うることなりました。

あさひ なみをどりいで
 朝日が波を躍出るやうな元氣を人は何時も持つ居なければならぬ。

だから人は何時も暗い中から起て日の出を拜むやうに心掛けなければならぬ。

そして日の入まで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に爲すだけの事を一心不亂に爲なければならぬ。

日は毎日、出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、其翌日は又新しい日の出を拜むことが出来る。

一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

老人の言ひ聞かした言葉は先づ斯んなものであります。そして權藏は奮ひ起つて老人の下を去つたのです。

池上權藏は此日から生れ更りました、元より強健な體軀を持って居て元氣も盛な男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねて親讓の田地は殆ど消えて無くなり、家、屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更ら世間へも面目なく、果は思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此日から生れ更りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓は勿論、炭も焼ば、材木も切り出す、養蠶もやり、地木綿も織らし、凡そ農家の力で出来ることなら、何でも手當次第、そして一生懸命に

やりました。五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山
 まふところ、荒地は美事な桑園と變じ、村内でも屈指の有富
 な百姓と成り終せたのです。しかも彼の勞働辛苦は初と少
 も變らないのです。

大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求めた時、

老人は靜かに

『お前さんは日の出を覺えて居なさるか。』

『毎朝拜んで居ります。』

『お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働らいたのは宜し
 い、これからは、其美しい處を見て、美しい働をも爲るが
 可からう。美しい事を。』

権藏ごんざうは暫しばく考かんがへて居ゐたが、

『それでは先まづ如何どんな事ことを爲なせば可よろしう御座ございましょう。』と
問とひました。老らう人じんは目めを閉とぢたまゝ

『それはお前まへさんが考かんがへなければならん、お前まへさんの心こころで、こ
れは美うくしいことだと思おもふこと、日ひの出でを見てあゝ美うつくと思おもふ
と何なんでも宜よろしい。お前まへさんは日ひの出でを拜をがむ
だらう。』

『ハイ拜をがみます。』

『それなら拜をがまれるほどのことをなさい。』

『及およびもつかん事ことで御座ござります、勿もつ體たいないことことで御座ござります。』
と権藏ごんざうは平伏へいふくしました、

『イヤそうでない、お前まへさんは日ひの出での元氣げんきを忘わすれましたか。』
 と言いはれて權藏ごんざうは、『解わかりました、難ありがた有ぞんう存ぞんじます』と言いつ
 たぎり、感泣かんきふして暫しばらくは頭あたまを得え上げあせませんでした。
 おほしまじんざうをう
 大島仁藏翁おほしまじんざうをうの死し後ご、權藏ごんざうは一時いちじ、守本尊まもりほんぞんを失うつた體てい
 で、頗すこぶる鬱々ふさいで居ありましたが、それしばしも少時ちまもとで、忽たちまもとち元げんきの元氣くわいを恢ふく
 復ふくし、のみならず、以いぜん前ましに増まして働はたらき出だしました。
 鬱々ふさいで居あたのは考かんがへて居あたのです。彼かれは老らう人じんの最後さいごの教けう
 訓くんを暫しばらく時わすも忘わすれることできが出来できないので、拜をがまれる程ほどの美うくし
 い事ことを爲するには何なにを爲したら可よからうと一いつ心しんに考かんがへたのです。
 神かう々／＼しき朝日あさひに向むかつて祈念きねんを凝こらしたこともあつたのです。ふ
 と思おもひ當あたつた時ときには彼かれは思おもはず躍をどり上あがつて喜よろこんださうです。『自じ

ぶん おほしませんせい
分は大島先生を拜んでも尚ほ足りない程に思ふ、それならば

おほしませんせい
大島先生のやうなことを爲ればよい。』

そこ
其處で學校を建てる決心が彼の心に湧たのです、諸君は彼

けつしん あま
の決心の餘り露骨で、單純なことを笑はれるかも知れま

せんが、しかし元來教育のない一個の百姓です、寧ろ

そのころ
其心ばせの眞率で無邪氣な處を思へば實に美しさを感ずる

のです、僕は。

とかく このけつしん さだ
兔も角も此決心が定まるや、彼は更に五年の間眞黒になつ

はたち
て働きそして、遂に一の小學校を創立して、これを大島

じんざう
仁藏の一子大島伸一に獻じ、大島小學校と命名して

らうせんせい きねん
老先生の紀念となし一切のことを若先生伸一に任して了

つたのです。

以上は 大島小學校の由來で御座います。けれども果して
池上權藏の志は學校を建てたばかりで、成就しました
らうか。

若し大島伸一先生を得なかつたなら、此小學校も亦た、
世間に有りふれた者と大差なく終つたかも知れません。

然し伸一先生は老先生の麗はしき性情を享けて更に
これを新しく磨き上げた人物として此小學校を監督し我
々は第二の權藏となつて教導されたのです。權藏の志は
もつとくわんぜん
最も完全に成就されました。

忘れもしません、僕が病氣で學校を休んで居ると、先生

が訪て來て

『貴様は豪い人になるのだから、決して病氣位に負てはならん病氣を負かしてやらなければ』と言つて僕を勵げましたこと
 があります。伸一先生は決して此意味を舊式に言つたので
 はありません。

『爲す有る人となれ』とは先生の訓言でした。人は碌々と
 して死ぬべきでない、力の限を盡して、英雄豪傑の士となる
 を本懐とせよとは其倫理でした。

人は人以上の者になることは出来ない、然し人は人の能
 力の全部を盡すべき義務を持って居る。此義務を盡せば則ち英
 雄である、これが先生の英雄經です。

そして老先生らうせんせいが權藏ごんざうに告げた言葉、あれが其註解そのちゆうかいです、そして權藏ごんざう其人そのひとを以て先生せんせいは實物教育じつぶつけういくの標本へうほんとしたのです。

ひで 日の出ひでを見ろとは、大島小學校おほしませうがくかうの神聖しんせいなる警語けいごで、其堂そのだうく々たる沖天ちゆうてんの勢いきほひと、其飽そのあくまで氣高けだかい精神せいしんと、これが此警語このけいごの意味いみです。

いちじつまた 一日又一日と、全力ぜんりよくを盡つくして働く、これが其實行そのじつかうなのです。

伸一しんいち先生せんせいの柔和にうわにして毅然きぜんたる人物じんぶつは、これ等の教訓けうくんを兒童こどもの心こころに吹き込むふこに適てきして居ゐたのです。

そして、先生せんせいも亦また、一心不亂いつしんふらんに此精神このせいしんを以て兒童じどうを導みちび

き、何時も樂げに見え、何時も其顔は希望に輝やいて居ました。

小學校生活の詳しい事は別に申しますまい。去年の夏

でした、僕は久ぶりで故郷に歸つて見ましたが、伸一先生は

年を取つたばかり、其精神と其生活は少しも變りません。

年を取つたと言つた處で四十二三ですもの、人間の働盛

です。精神氣に變のある筈もないのです。

たゞ老て益々其教育事業を樂み、其單純な質素な生

活を樂しんで居らるゝのを見ては僕も今更、崇高の念に打れ

たのです。

昔のまゝ練壁は處々崩れ落ちて、瓦も完全なのは見

當ぬ位それに葛蔓が這い上つて居ますから、一見廢寺の壁

を^み見るやうです。

其^{その}壁^{かべ}を越^こして、桑^{くは}樹^{のき}の老^{らう}木^{ぼく}が繁^{しげ}り、壁^{かべ}の折^をり曲^{まが}つた角^{かど}に
 は幾^{いく}百^{ひやく}年^{ねん}経^たつか、鬱^{うつ}として日^ひ影^{かげ}を遮^{さへぎ}つて居^ある榿^{かしの}樹^{のき}が盤^{わだかま}居^あ
 つて居^あます。

昔^{むかし}風^{ふう}の門^{もん}を入^はひ桑^{くは}園^の間^{あひだ}を野^の路^{みち}のやうにして玄^{げん}關^{くわん}に
 達^{たつ}する。家^{いへ}は僅^{わづか}に四^よ間^ま。以^い前^{ぜん}の家^{いへ}を壊^{こは}して其^{その}古^{ふる}材^{ざい}で建^{たて}たものら
 しく家^{いへ}の形^{かたち}を作^なして居^あるだけ、風^{ふう}趣^ちも何^{なに}も無^ないのです。

先^{せん}生^{せい}は其^{その}一^{ひと}間^まを書^{しよ}齋^{さい}として居^あられましたが、書^{しよ}籍^{せき}は學^が
 校^く用^{かう}の外^{ほか}、新^{しん}刊^{かん}物^{もの}が二^{しゆ}三^{さん}種^{しゆ}床^{とこ}の上^{うへ}に置^おいてあるばかりでした。
 縁^{えん}邊^がには豆^{まめ}が古^{ふる}ぼけた細^{ざる}籠^{いれ}に入^{ほし}て干^あてある、其^{その}横^{よこ}に怪^{あや}しげ
 な盆^{ぼん}栽^{さい}が二^は鉢^ち並^{なら}べてありました。

『とうきやう 東京の仕事は如何です。新聞は毎々難有う、續々面白く議論が出来ますなア』と先生は僕の顔を見るや口を開きました。

『イヤ如何も愚論ばかりで恥かしく御座います、然しあれでも私の力一杯なのです。』

『それで十分です、力の限り書いて其で愚論なら別に仕方も無いらな。けれども樂は有ります。私はこの頃になつて益々感ずることは、人は如何な場合に居ても常に樂しい心を持って其仕事をする事が出来れば、則ち其人は眞の幸福な人といひ得ることだ。不精々々にやつた仕事に立派な仕事はない、そして一生懸命に仕事する時ほど樂いものはないやうだ。』

先生の此等の言葉は其實平凡な説ですけれど、僕は先生の生活を見て此等の説を聞くと平凡な言葉に清新な力の含んで居ることを感じました。

伸一先生は給料を月十八圓しか受取りません、それで老母と妻子、一家六人の家族を養ふて居るのです。家産といふは家屋敷ばかり、これを池上權藏の資産と比べて見ると百分一にも當らないのです。

けれども先生は其家を圍む幾畝かの空地を自から耕して菜園とし種々の野菜を植ゑて居ます。又五六羽の鶏を飼ふて、一家で用ゆるだけの卵を採つて居ます。

書齋の前の小庭は奇麗に掃除がして有つて、其處へは鶏も入

れないやうにしてあります。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有ません、け

れども先生は眞の生活をして居のです、先生は決して村

學究らしい窮屈な生活、ケチくした生活はして

居ません、けれど先生は自分の虚榮心の犠牲になるやうな生

活は爲て居ません。

僕は先生と對座して四方山の物語をして居ながら、熟

々思ひました、世に美はしき生活があるならば、先生の

生活の如きは實にそれであると、先生の言論には英雄

の意氣の充て居ながら先生の生活は一見平凡極るもの

でした。

先生せんせいを訪とふた、翌よくじつ日じつでした、使者しやが手紙てがみを持もつて來きて今いまから生徒せいと十數すうめい名なを連つれて遠足ゑんそくにゆくが君きみも仲間なかまに加くははらんかといふ誘引さそひです。僕ぼくは直すぐ支度したくして先生せんせいの宅うちに駈かけつけました、それが朝あさの六時ろくじ、山野さんやを歩あるき散ちらして歸かへつて來たのが夕ゆふべの六時ろくじでした、先生せんせいは夏期休業なつやすみといへどつね、生徒せいとに近ちかづ、生徒せいとの爲ために時間ときを送おくつて居ゐらるゝのです。

諸君しよくんの中うち、若もし僕ぼくの故郷こくにに旅行りよかうせられるやうなことが有あつたならば、是非ぜひ一度いちど大島小學校おほしませうがくかうを訪とはれたいものです。海かい岸かきに近ちかき山やま、山やまには松しょう柏はく茂しげり、其その頂いたゞきには古城こじやうの石垣いしがきを殘のこしたる、其その麓ふもとの小高き處こたかところに立たつて居ゐるのが大島小學校おほしませうがくであります。それが僕ぼくの出しゆつしん身の學がく校かうなので、四十幾いく

さい 歳の屈強な體軀をした校長 大島氏は、四五人の教員を相手に二百餘人の生徒の教鞭を採つて居られます。

『日の出を見よ』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變りのないやうに、全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覽になりましょう。

語り終つて兒玉は一呼吸吐くやオックスホードの紳士は

『なるほど能く解りました、日の出は力です、美です、そして實に又希望です、僕は貴殿が大島小學校の出身であることを感じ、誇らるゝことを、當然と思ひます。僕も一度是非お國に參つて大島伸一先生にもお目にかゝりたく御座ます。』

『そして、僕は池上權藏に會つて見たい』など高等商業

の紳士は大眞面目で言つた。

『權藏は今如何して居ますか』と問たのはハーバードである。

『さうでした、權藏のことを言ふのは忘れて居ました、益々

達者に暮して居ます。大島小學校も今は村の經濟で維持

して居ますが、しかし村の經濟の首腦は池上權藏ですか

ら、學校の保護者は依然として其の昔覺悟まできめた百姓

權藏であります。

權藏の富は今や一郡第一となり、彼の手に依つて色々々

の公共事業が行はれて居るのです。けれど諸君が若し彼に

會たら恐らく意外に思はるゝだらうと思ひます。

權藏は最早彼是六十です。けれども日の出づる前に起きて

ひぼつ 日の没するまで働くことは今も昔も變りません。そして大島

じん 老人が彼を救ふた時、岩の上に立つて、

『來年はこれよりも美しくしい初日の出を拜みたいものだ。』と

言つた言葉、其言葉を堅く覺えて居て、其精神を能く味ほう

て、年と共に希望を新たにし、一日又一日と働らいて老の至るの

を少しも感じない様子です。

『老を知らなければ老いず、僕は池上權藏は死ぬるまで老な

いだらうと思ひます、死ぬる今はの際にも、彼は更に一段の光

明なる生命を望んで居るだらうと思ひます。不死不朽とは

このことでは御座いますまいか。

權藏は其居間の床に大島老先生の肖像をかゝげ、其

横こに日ひの出での圖づが下さがつて居ゐます。これは伸しん一いち先せん生せいに求もとめて
 畫かいて貰もらつたのださうです。そして大島小學校おほしませうがくかうの一室いつしつには
 池上いけがみ權藏こんざうの肖像せうざうがかけてあります。』

それより一週間いつしうかんばかり經たつて、兒玉進五こだましんごの宅たくで彼かれの所謂いはゆる同
 窓會うさうくわいが開ひらかれた。

兒玉こだまは此席このせきで同好俱樂部どうかうくらぶの一いち條でうを話はなした、他たの二人ふたりは唯ただ
 微笑びせうしたばかり、別べつに何なんとも評ひやうしなかつた。

會くわい毎ごとに三人さんにんは相談さうだんして必かならず月つきに一度いちどの贈品ぞうひんを大島
 小學校せうがくかうに送おくる、それが必かならずしも立派りつぱな物ものばかりではない、筆ひつぱ
 墨くの類るみ、書籍しよせき圖畫づぐわの類るみなどで、オルガン一いち臺だいを寄送きそうしたの

が一番金目の物であつた。

『今度は何を送らう』と兒玉は二人に問ふた。

『矢張書籍が可からうぢやないか』と判事が答へた。

『本なら僕に考へがある。今度會社で世界航海圖の新しい

のが出來たから、あれを貰つて送らう如何だね、』と郵船會

社員が一案を出した。

『それも至極妙だ。けれども其他何にしよう。』

『畫は如何だらう』と判事が一案を出した。

『畫も可いが最早有りふれたものばかりだからなあ。』

『實は先日、倫敦の友人から『世界の名畫』と題して、

随分巧妙に刷てあるのを二十枚ばかり贈つて呉れたがね、そ

れは如何だらうかと思ふのだ。』

『可かろう！』と他の二人は賛成した。

『其所で例の唱歌の一件だがね、僕は色々考がへたが今更唱歌にも及ぶまいと思ふのだ如何だらう。』

澤山じやアないか。それをなまじつか今の歌人に頼んで作

らした所でありふれた、初日の出の歌などは感心しないぜ。若

し作くるなら學校から出た者が作ったのでなければ、とても

『日の出を見ろ』の一語で我等が感ずるやうな物は出来ないぞ、

如何だらう？』と兒玉の説いたのに二人は異議なく賛成し、兒

玉は二人の前で大島校長宛にすらくと次の手紙を書いた。

『御依頼の唱歌の件は我等三人とも同意致し兼ね候。東

京にも歌人の大家先生は澤山あれど我等のやうに先生
 の薫陶を受け大島小學校の門に學び候ものならで、能く我
 等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべき
 や、甚だ覺束なく存候。我等の學校も何時かは眞の詩
 人出づることあらん。その時まで矢張り『日の出を見ろ』で十
 分かと存候。日の出の唱歌を歌ふて朝寢坊する人
 物が學校から出るやうになりては何の益にも立つまじく、其
 邊御賢慮願上候。』

三人は連名で此手紙を出した、大島先生から直ぐ返
 事が来て

『御主意御尤に候。日の出の唱歌は思ひ止まり候。淺まし

い哉。かな 教室けうしつに慣なれ候さふらふに從したががつて心こゝろよりも形かたちを教をしへたく相あひな成かたむる傾む
 き有これあり之あり、以後いごも御ごちゆうい注意ねがひ願あげ上さふらふ候ふ。』

青空文庫情報

底本：「定本 國木田獨歩全集 第三卷」学習研究社

1964（昭和39）年10月30日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1984（昭和59）年1月20日第10刷発行

底本の親本：「運命」佐久良書房

1906（明治39）年3月18日発行

初出：「教育界 第二卷第三號」金港堂

1903（明治36）年1月1日発行

※「今更《いまさら》ら」と「今更《いまさら》」の混在は、底本

通りです。

入力：葛西重夫

校正：川山隆

2014年12月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日の出

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>